解紛記

元和六年六月吉日

五番　備後

一　正家応安の頃 正廣は正家が子 此親子を古三原と云う　此一類も体配は陰陽定まらず多分刀脇指ともに菖蒲造り多し　さなければ刀は中切先にして鎬高く中へ寄せて峯薄に作りたること備後物の惣形儀なり　又地肌は板目にしていづれも細やかなり　但し古三原親子は鍛あらわるるこころありて刃も大略刀脇指ともに帽子尋常に丸く少し中へ寄せて返り塩相も沸あざやかに見事なり　これを青江に見まがうことあり　しかし三原は右に記すごとく地肌板目にて備中物程はつまらずして体配も刀は鎬高きを以て紛るゝ事なし

又古三原にも天然乱るることあるべし　刀は腰本ばかり乱るるもあり多分直刃によらず峯を焼くこと末々まで多し　この古三原の乱れたるは刀脇指ともに必ず箱刃ありて藤嶋に似る物なり　されども藤嶋より刃づき尋常にて紛れなし　又親子の内に鍛をもあらわれず刃廣にして出来物は結句正廣に多し　但し親子の出来には殊の外甲乙あり　直刃などにはいかにも塩相浅く備前物の下作どもの風情なるにもあるべし　さりながら帽子返りの尋常なるを以て三原と知るべし

一　法華三原の事　これも正家が子と云う　此作は親より地肌いかにもこまやかにすみて直刃もあり　又少しのたれ乱れなるも多し　塩相は多分はづしかちにして沸まじり刃づき以下高田の友行に似たり　但し友行より地肌細やかに美しく出来る物なり　刀体配にて紛れはなし同正重 正信 正家かようの類も乱れ多し又直刃もあり　いづれも地肌 惟塩相まで小反りに似る物なり　但し小反物よりはおとなしく乱れも玉垣足などはなし　のたれ乱れに先つよく焼き返して沸たる多し　又これらの直刃も備前物より帽子尋常に丸く返るなり

一　木梨三原の事　これは大乱れに取分け花やかに峯を焼き湯走り多く長谷部の様なるもあり　又のたれ乱れにして石州物の乱れのようにあまり手をそろえずして惟塩相も直綱長谷部よりははぜやかにすみ入り地肌もつまり出来物は上作ともに見まがはす程なるべし右の外辰房 貝三原などとて末々多しといえどもみな下作なり　但し辰房には色々目利物多しのたれ乱れにしてこれも末の直綱の風情なるもあり或はひたつらにして塩相すすどくきわだち末の高田に似たるもあるべし　又貝三原は刃の体木梨に似たり　しかし惟塩相浅くして位まぎれざる物なり

令和六年（二〇二四年）十月一日

其阿彌秀文編集